

君主を攻め、一四三〇年是等の地方を占有しぬ。  
ハンガリー人は従来ダルマシア、サービア、ワラキア、ツランシルヴァニア等諸方に戦ひしが、アドリア海、ダニユープ河、カーパシアン山の三方より侵襲し來れるが、ツトマン人を撃退せんには強力なる準備を要するを觀、親ら此の大敵退治の衝に當らん事を請ひしものあり、ジョンランセデと云ふ。彼は一四四二年ヘルマン・シユタツトに二万のトルコ人を壓殺して連りにダニユープ附近の諸市を恢復せり。時にギリシア皇帝はカソリック諸國の援を得んことを期してカソリック及び東シリア兩教の合併を提言せしも、カソリック諸國の僧正の抗議に遭ひ議事はさぶさ。されどトルコ人の進撃は大にヨーロッパの反動を起し、ポーランド王兼ハンガリーの攝政ラヂスラウは法王の使節と共にブルガリアに進みければ、アマラト本も心安からず頻に講和の談判を重ね、ロンヤヂリ亦之に賛せしも、獨り法王の使節のみ異教徒と條約を結ぶは耻辱なりと考へ、之を承諾する色なかりければ、十字軍はザアルナに進み、アマラトは之を激撃し、殆ど之を全滅し、ロンヤヂリのみ少許の殘兵を率ゐて戰場を遁れたり。されどアマラトは到底基督教國民を悉く

壓滅すべからざるを知り、路を轉じて一四四六年モレアを征服し、エピルスを襲ひ、其の山中にて勇敢不屈のジョーヂカスプリオットを獲、之をスカンダーベツグと名け、之が懷柔には大に苦心せしが、一四四三年トルコのフンヤヂリに敗らるゝに及び、斷然トルコに叛き、激しく之に抵抗を試みつ。アマラトの非常なる盡力に拘はらず、スカンダーベツグは出沒自在にして大にトルコの軍を悩ましければ、フンヤヂリも之に元氣を鼓舞せられ、一四四八年進てサービアに入りしが、アマラトは十五万の大軍を以て之を激撃し、殆どハンガリー軍を全滅し、フンヤヂリ僅に身を以て免れたり。其の後三年を経てアマラト死シ、マホメット二世嗣立す。帝傲岸誓てコンスタンチノールを陥れんとし、新にボスフォルス海峡のヨーロッパ沿岸に堡壘を起し、大砲鑄造所を設けて、ハンガリー人指揮の下に無敵の砲彈巨砲を新造し、兵二十六万を以てコンスタンチノールを圍み、港口には艦隊を遊弋せしめて之を封鎖し、其の包圍の嚴なる譬ふるに物なし。而して防禦軍は約七千人(内二千人はヴェニス人、及びゼノア人)より成り、ゼノアの將ヂヤステニア之を奮し、皇帝コンスタンチンは寺院にありて敵軍撃退の祈禱に専心し、案外防禦堅固



なりしもスルタンは郊外に新道を築き急に艦隊を以て港口に迫り一四五三年五月二十九日午前一時頃夜襲的總攻撃始まり拂曉に至りて全市トルコ人の手に落ちぬ。主將シヤスチニアン重傷を負ひ帝コンスタンチンも華々しき最後を遂げロイヤ帝国最後の瞬間に限りなき崇高の威を與へ十字の旗はセント・ソフィアの塔上に翻へらずなりぬ。

## 第六章 中世紀末に於ける文明の状態(二四五—三〇一)

文明の新紀元 中世紀の末期に至り地方分權の制度衰へて中央集權之に代り、農僕の解放、中等社會の勃興、第三級の進歩等政治上並に社會上の改良着々として行はれ、中世紀に特有なる貴族の堅甲利兵は平民軍の彈丸硝藥に壓倒せられ、中世紀の盛時には智識に關する事は一切僧侶の掌中にありしもの、今は獨り僧侶のみならず、俗人も智を研ぎ、學に勵み、天に關する問題も僧侶は之を神學的に論ぜしもの、今は俗人之を純粹に浮世の問題として研究するに至れり。

### グレゴリー七世よりボニフェース八世に至る法王の状態

グレゴリー七世の時よりボニフェース八世の時に至る迄、即ち十一世紀の終末より十四世紀の初期に至る迄、羅馬法王の權力は最も盛大を極めしが、其の後俄然として勢衰へ初めたり。抑もグレゴリー七世は俗界の君主に對しては絶對的に優上權を主張し、之を以て將來法王が俗界に對すべき根本原則とせり。是に繼てアドリアン四世は獨逸皇帝中最も有力なるフレデリック・バーバロッサを屈せしめ、インノセント三世は矯激なる語調を以て法王權を主張し、法王を日、帝王を月に譬へ、精神を掌るものなれば身體を掌る可き帝王よりも肝要なりと論ぜり。フランスのフィリップ・オーガスタス、イングランドのジョン・ラックランド、ノルウエーのマグヌス、其の從妹と結婚せるレオンの王、法王の使節を侮辱したるハンガリー王等は皆法王より破門の法刑を受け、其他同様の運命に會ひしもの擧げて數ふ可からず。而してボニフェース八世は、エナム・サンクタムなる法令を發し、インノセントの夫れよりも一層激越なる口調を以て論じて曰く、教界は精神俗界の兩劍を統べ、精神の劍は法王之を支配し、俗劍は國王及び貴族等之を握るも、之を振はんには僧界の許可を須たざる可からず云々。と而も是等の有力なる法王は之を後世に傳



へんが爲め聖律編纂の業を企て、一二三四年法王グレゴリー九世の時出版せる法王の令旨集は、ヘンナフオールドのライモンド之を纂め、アレキサンダー三世、インノセント三世、オノリウス三世の令旨をも加へしが、其後ポニファエース八世、グレゴリオ五世、ジョン二十二世等の令旨を續刊せられ、聖律學者の註釋を加へたる聖律研究に廣大なる分野を開きぬ。然れども訟師等は其の研究せる聖律の影響を受け、不知不識の間法王の優上權を是認せり。之と同様の理由にて法王は罪障准許權を握り、寺領の管轄權を要求し、オグリウス三世の時各教會には必ず二名の牧師を法王の爲に餘分に備へんことを規定し、ポニファエース八世等は寺領の配分は俗界の干渉を受けず、法王の自由たるべきを主張せり。其他寺院の歳入を基督教國全帯に課する事も自然の結果として起り、インノセント八世の如き代官を派して各國の僧侶より其の收入の四十分の一を徵集し、其後次第に其額膨脹しけるが、中世の後半期にはドイツの三分の一、イングランド及びフランスの五分の一は寺院の所領なりしに徴するも、如何に教界の勢力の盛大なりしかを知るに足らむ。僧侶の權力其の盛大の極に達するに至り、貴族諸王族等も次第に教權の壓迫を患ひ、法

律を制定して僧侶の土地所有を制限するに至れり。一二七九年イングランドに發布されたる被讓産規定の如き其の著名なるものなり。而してヨーロッパ諸國の普通裁判は教界裁判と兩々相對して進歩せしと雖ども、僧侶は俗界の普通裁判を受けざるのみならず種々の特權を有し、且つ俗界君主の中にては往々貴族の跋扈を制するには王廷裁判よりも教界裁判の方便なるを思ひて教權を依頼するものさへあり。セントルインフレデリック二世、アルフォンソ十世の如き然りとす。イングランドにては事情少しく之に異れり。而して其の勢の極まる處遂に教權は俗權を制してヨーロッパは教政一致の國となるべきか、將た教會は寡人政治となり或は專制制度となるべきかの問題は當然起るべし。法王ポニファエース八世の盛時には實に政教兩權を全然一手に掌握すべき勢ありしに、其後三年俄然法王の權力地に墜ちヨーロッパの祭政一致國となるが如きは一個の杞憂と化し了んぬ。而も第二の問題に至りては其後二五〇年を経て解決を見るを得たり。アヴィオンに於ける法王(三三〇九—三三七六)及び西方の大分裂(一四三九—一四八四)是迄全歐洲に高く翺りたる法王も一三〇九年クレメント五世がアヴィオンに



て幽囚の身となりたる之をバビロニア幽囚といふ以來、約七十年の間法王の世代は屢變したるも、何れもフランス王家の操り人形となり、(後にはオーストリア家は操縦せられぬ)昔時の威嚴權力は其痕を止めず。ベネデクト十二世の如き破門の皇帝パツリア家のルイの使節に向ひ、潜然涙を揮て其の處置の本心に出でず、唯フランス王の意に反せば、廢位の憂忽ち至らんことを恐るゝに由るのみなるを陳辨せりといふ。かくて法王も今は其の野心を遂げんには、權力よりも財力に依るの捷徑なるを察し、アヴェイニオンの法王は汲々として黄金の蓄積と僧侶に對する課税を始め、ジオン二十二世の如き主なき寺領より一年分の收入を徵集しければ、さうぬだに法王のローマに在らず、單に使節の駐在に止まるを怒れるイタリア人は、一三七八年、グレゴリー十一世の死を機とし、イタリア生れのパトリ大僧正を擁立して位に即かしめたり。是をウルバン六世といふ。しかるに此の事件は頗るフランス人を激せしめければ、法王及び其の從屬者の漸く自由を得るや、間もなくフランス人及び一部のイタリア人は、ゼネバのカーヂナルにしてフランス出身の法王なるクレメント七世を擁立し、ヨロツバに於て同時に二人の法王現出し、西方

教界の大分裂を來し、イングランド、ドイツ、ハンガリー、ボヘミア、ホルランド及びイタリアの大半はウルバンを賛け、フランス、スペイン、スコットランド、サヴォイ、ロレンインはクレメントに味方せり。斯の如き現象は基督教界未聞の事に屬するを以て、何れも熱心仲裁の勞を採らんとし、特にパトリ大學の如きは殆ど熱狂的運動を試み、三議を提出して兩者を調停せんと欲せしも成らず。斯かる際にクレメント七世死せしかば、其の黨與は急ぎスペインルナの人ベネデクト十三世を立て、(一三九四)毫も調停の議を聽かず。其後を繼げるポニフェース九世、インノセント六世、グレゴリー十二世、皆同一の態度を執りて屈せざりき。

**宗教大改革の先驅及びピサ、コンスタンス、バゼルの會議。** 法

王一度アヴェイニオンに移りてより、反法王の氣風處在に起り。十四世紀の末期にはフランスにジャックエリ、マーセル、カボシーヌあり。フランダーには兩ゲアシ、アルテヴェルド、イングラントにワット、タイラー、イタリーに、リエンツオ等あり。然れども彼等の運動は未だ充分なる手段を採るに至らざりき。又ジオン、ウイツク、ラフ、クレマニーのニコラス、ゲルソン等亦援なきに非ず。ゲルソン敬虔にして



忠愼なれども、頗る法王の機嫌を損じ、基督の模倣の作者を以て擬せられたり。彼は其の著書に於てローマ宮廷數千の官吏は唯黄金獲得に汲々として離れ日も足らざるに、一人の起て真理徳義の傳播に従事するものなきを憤慨せりといふ。

ローマ、アサイニオンの兩法王相争ひてより教界の混亂其の極に達しければ、ピサのカーチナル會議(一四)はベネチクト、グレゴリーの兩法王を廢しアレキサンダールを撰立せしに、兩法王は退位を肯ぜず、同時に三人の法王西歐に出現し混亂は却りて以前に倍蓰せり。而して此會議に於て先づ決すべきは法王又は會議の中何れが優上の地位に立つ可きかの問題なり。而るに法王は三人共に皆宗教會議の一般的性質を帯ぶるは其の參集人員の夥多なるにあらずして、法王の出席すると否とに依り決すべきものなるを論じ、ガリア派教會の首領ゲルソンは此の法王制を排し、先づ教界を二種に分ち、一般教界はキリシヤ人、野蠻人、男女貴族平民貧者富人等其の身分如何を論ぜず、一般に基督教徒を悉く包含せるものにして其の爲す處に一の過誤なく一の侮辱を蒙るなきものを云ひ、使僧教界は基督を首長とし法王カーチナル高僧僧侶國王、人民等其の階級如何を論ぜず悉く其の一員たり。

故に此の教界には過誤羞辱分裂等の不祥なる現象續々現出すべく、畢竟一般教界の器械たるに過ぎず。故に法王にして不適任ならば教界は決して之を廢するに躊躇すべからず云々。と之に續てジョン・ウィックリフは全カソリック教を倒さんとの意氣を以てカソリックの教義特に其の變體説を攻撃して餘蘊なかりき。ジョン・フツス(ボヘミア人)はウィックリフ程極端に亘らざりしも猶ほ三大攻撃點を指摘せり。即ち基督教の教義は聖經を以て最も確實なる憑據とすべきこと、僧侶の生活を舊時の純潔に返へし之をして一切俗界に干渉せしめざることを、僧侶の精神純潔、操行無疵の者に限り精神界の權力を准許すべきことを述べ、更に進て僧侶の穢侮聽聞、偶像崇拜、及斷食等の不可なるを論じ、僧侶及び法王の宮廷を以て其の罵詈の對象とし、清僧の憎惡及び非基督教者の二書を著はして其の所説を公にせり。法王アレキサンダー五世のピサ宗教會議解散後、繼嗣ジョン二十三世は輿論とドイツ皇帝シグムンドの勸告に基づき、一四一四年ピサに第二回宗教大會議を開きぬ。來り會する者僧正、長老、諸國君主の使節、諸大學の委員、下級神學者の一團法學博士等あり。皇帝シグムンド數々會長席に就き投票は頭數の多寡



によらずして英佛獨伊の四國民各一票を有することに決し、温和黨に便宜を與へければ、極端なる法王黨及び改革黨は共に會議の排斥を受けたり。而して會議の結果としては新にマルチン五世を法王に選び、グレゴリー七世は位を避れ、ベネチグト八世及びジョン二十三世は共に免職となりければ、一四一七年教界の分裂も一旦中止となれり。爾來宗教大會議は定期に開會すること、僧侶の修養及び生活状態に大改革を加ふるに決せしも、法王マルチン五世は決議の實行を避け、一四一八年未だ其の結果の顯はれざるに先ちて會議の解散を宣言しぬ。其の後十餘年を経一四三一年に至り、法王イウゼニウス四世はバゼルに宗教大會議を開きけるが、會議はコンスタンス會議の決議に則らんことを主張し、會議の解散は必ず議員三分の二の同意を要するを論じぬ。是に於て法王は議場を初めフェララに、後フロンセスに移せしも、出席者極めて少く、多數はバゼルに止まり、一四四三年迄繼續し且つイウゼニウスを廢し、サヴォイ公フェリックス五世を法王とせり。斯くて兩法王黨は火花を散らして争ひ、教界の分裂は一四四八年フェリックス五世の讓位の際迄繼續せり。斯の如き状態にて中世紀の間に全ヨーロッパを蔽ひたる教

界の勢力全く地に墜ち、混亂紛擾相繼て起れり。此の悲况を修め、他日の活動を計らんとする者無きに非ざりしも、修養生活の状態以前よりも一層墮落しければ、遂に第十六世紀に於ける大改革を喚起するに至りたるは是非なき次第なり。

## 第七章 國民的文學及び中世の新發明

イタリー及びフランスの文學 中世紀の盛時には智力的生活は全く宗教團體に限られ、其の用語もラチン語主として用ゐられ、管に教會のみならず普通語としても亦行はれたり。而も其の末期には諸國の人民の個人主義は漸く著しく、且つ其の言語の中にも一種の訛を生じ、管に一般人民のみならず文學上の用語としても亦用ゐられ、ラチン語の用漸く廢れたり。而も中世紀の盛時に於て既にイタリーは商工業及び政治上著しき發達を遂げければ、從てイタリー國も最も長足なる進歩を遂げ、ダンテの崇高凄婉なる、ペトラルカの優雅なる、ボツカチオの奇拔なる詩調は、蓋其の最も發達したる極致を表現せるものといふを得べし。而るにフランスの文學はイタリー文學の如く早くより完全の域に達することな



く、ダンテ、ペトラルカの如き皆ヴァーヂルを學び之を祖述せるが如き形跡ある處  
 妙からざるも、フランス文學の祖たるジョアンヴァイル、フロアサーの如きは皆師事  
 する處なく、寧ろ獨力を以て文學界を開拓せるものなり。ジョアンヴァイルの散文  
 は其の長處にして筆鋒銳利、敘事簡明を以て著はれ、フロアサーは其の更に完全の  
 域に達せるものなり。其の文體の優雅にして描寫に巧なる、到底當時に其の匹儔  
 を求むるを得ず。其の着色の新鮮にして自然なる其の情緒の濃密にして穩健な  
 る、皆以て優に百代の珍とするに足る。彼は一三三七年ヴァレンシアンに生れ、  
 侶として諸方の城々を歴問し所謂ヅル・ヴェールの状態なりしが、時恰もイング  
 ランド、フランスの二國戦正に酣にして兩國の騎士各豪華と競ひ暇あれば比武を  
 事とせる際なれば、彼も亦此の間に出入し嚴正にして批判的なる歴史よりも寧ろ  
 采華爛熳たる時世の描寫に心血を注ぎぬ。彼の手に成りたる年代記は一三二六  
 年より一四〇〇年に亘り、續てクリステン・ツ・ピサンは、チャールス五世の歴史を著  
 はし、アレーン・レ・アチエーは、チャールス七世の歴史並に、ル・クアヅリ・ローグ・アン  
 ヌ・クチーフを公にせしが、二人共に博學洽聞にして古事に精通し、殊にシャール・デ

一の如きは文脈一致、用意周匝にして苦心慘憺一言一句も之を忽にせず、所謂咳唾  
 珠を成せるものにして、後世バルザックの僅に之と比肩し得るに足るあるのみ。  
 又此頃現今演劇舞臺の濫觴たる小演臺の上に立ち、多數の觀客判定者の群集せる  
 中にて、宗教秘密祭を行ひ、聖經を俗語に譯したる上更に之を舞臺の動作に上すこ  
 と行はれたり。蓋し是より先き諸生がラチム、イタリー等の諸語を以て記載せる  
 問答を教會の歩廊中に吟誦せしこと多分其の起原となりしならん。斯くて時代  
 の進むに従ひ是等の嚴正にして問答躰なる演戲漸衰へ、奇怪無雜なる分子を含有  
 せる演戲は、數十人の奏樂に合せて盛に行はれたり。而して斯の如き神聖なる事  
 蹟を演ずるの特權も次第に俗人の手に移り、市民相結びて博愛社を起し、フランス  
 王チャールス六世の如き一四〇二年特許狀を與へて其の設立を許しければ、市民  
 は直に宗教的演劇を舉行せしに大に好結果を奏し、日曜日毎に觀客堵をなし、盛況  
 比なし。かく宗教演劇の發達と共に批判的譏笑的性質を帯びたる喜劇も漸く行  
 はれ、國王フィリップ・フェアートの組織せる法廷の書記之を作りしが、十五世紀の頃  
 にはフランスの喜劇は益盛にして遂に「ラヴォカート・パツラン」と稱する有名なる



滑稽狂言の一大傑作を出すに至れり。然るに社會組織の革命及道德の頹廢を以て特徴とせる中世紀の末期に一のフランス文の傑作見えざるは素より怪むべきにあらざるも、アゼンクールに捕虜の身となりたる、オルレアン家のチャールスの如きは優雅の口調を以て沈鬱せる情緒を叙べ、無名の作者(或は云ふ、トーマス・ア・カムピ)の作なる「基督の模範」の如きは怪訝の念に苦しめられて懊惱堪ゆる能はざる。人類の精神の不可思議なる點を精念せり。

北方文學(イギリス、ドイツ、スカンデナヴィア語) イングランドは中世時代に屢外國人の侵略を蒙りしが、所謂一種特有なるイギリス語を形るに至りしはヨーロッパの歴史中最も後れたるもの一なり。サクソン人、デーン人、ノルマン、フランク人等のイングランドを侵すや、其の國語も亦急轉直下の勢を以てイングランドを襲ひ、同一の土地に異りたる沙土を残留して去れり。而してローマ帝國の滅亡後ローマ化したるケルト人を襲ひて、之を征服したるドイツ人種のイングランドに輸入したる言語はサクソン語にして之をイギリス語の根本語とす。續いてデーン人侵入の結果新に其の言語の之に加はりたるもの亦尠からざ

りしが、ノルマン王朝建設せらるゝに至りノルマン、フランス語の影響を受けて漸次變形を生じ、ケルト語の痕跡全く絶え、サクソン語を基礎としてフランス語の分子之に加はりたる新語を生じぬ。されど此の新語は未だ全國一般に行はるゝに至らず。國王を始めとして廷臣貴族等上流社會には一般にフランス語行はれ、フランス語はイングランドの公用語となり學校にても亦盛に之を用ゐたり。勿論ウイリアムの子孫はサクソン語を全く壓倒しフランス語のみを流行せしめんと努めたれども、サクソン人の頑強性は容易にフランス語に同化さるゝ事なく、斯かる間にノルマン分子とサクソン分子との間次第に舊時の抗敵心を捨て相融和するに至りしを以て、従て國語の上に於ても大影響を蒙り兩語相混和し茲に新にイギリス語を生ずるに至れり。而して此頃文法教師ジョン・コリン・ウォール、リチャード・ペンクライク等小學校に於ては必ずフランス語を捨てイギリス語を用ゐざる可からざることを主張しイギリス語の創成に與りて力ありき。且つ一三六二年エドワード三世は一の法令を發し、法廷には以後必ずイギリス語を用うべきを規定し、イギリス語は公用語としても亦用ゐらるゝに至れり。此頃より文學の方



面に於ても亦イギリス語の用漸次廣まりウイリアム、ラングランド「夢想」を著はして痛く當時の僧侶を攻撃し、詩人ゼオフレイ・チョーサーも亦「ツロイル・スケレシツダ」名譽の家「カンターベリー物語」を著はし、夥しく新熟語を用ゐる其の時代の状態を實寫すること極めて精確に其間處々諷刺を交へたり。其の著書は百代英文學者の珍とする處なり。是と殆ど時を同じくして散文も亦起り、ジオン・ウイックリフの聖經翻譯「サー・ジョン・モーンデグイル」の東方旅行記の翻譯共にイギリス語を用ゐたり。

ドイツ語は中世紀を通じて最も變化を受くること少く、偶々外國の侵入を受くることありとも用語に新分子を加うるが如き事なし。而も其の文學の發達の最も遅々たりしが如きは頗る怪むべしと雖も、其の文化常に他國よりも後れ且つヨーロッパの文明を受くること最も鈍き諸國の人民と交通せるが爲め、文學の發達を促すべき刺戟に乏しかりしを以てなり。シャールマン帝以前の文學の遺物としてはウルフアイラスの「ゴシツク聖經」インドールの論說「ツナチヂイタテドミニ」をセント・ベオデクト寺の僧ルールの翻譯せるもの等ありしが、シャールマン帝の

時に至り文學の方面は俄然生氣を生じヒルデブランドの歌の斷片の如き最も名あり。帝の死後ルイ三世(フランス)の北人擊退の歌及びルイ・ゼ・バイオスの命により著はれたる「福音の調和」と稱する歌の如き出て僅にドイツ文學の存在を示し、が、オット大帝以後ホーヘンスタウエン家の帝位相續に至る迄死滅の状態にありき。而して第十四、第十五兩世紀頃に至りて韻文全く其の跡を絶ち、散文漸く盛大に赴かんとする傾ありしも未だ謂ふに足らず。戀愛詩人は皇帝貴族の何れよりも確實なる保護を得る能はず。唯商業貿易の利により次第に繁榮せる南部諸方の都府は之を獎勵するの傾ありしも、是とても充分なる成效を見るに足らず。唯南の方スイツルランドにては崇高なる情緒を漏らせる詩多く出て、ヴェイト、ウエベル、ジャン、ヴィオル等の戰詩、ゼムバッハ役の史詩等も亦行はれ頗る人口に膾炙せり。ドイツの散文は素とカロリング朝の記録及びフランスの稗史より脱化せるものにして主に世話物及び時代物小説として現はれけるが、其後法律及び説教の類にも亦用ゐられ最も哲學的議論の表現には適當なるを示せり。其後第十四、五世紀頃には年代記編纂の業起り、リムブルグ、アルゼー、ス、チユーリンデアに行



はれたり。要之中世に於けるドイツ文學は「ニーベルンゲン」の歌謡の外特徴とすべきものなく、是れすらイリアッドに比すれば數籌を輸せり。

スカンデナヴィア文學は其の國語と同様原とドイツの根原より出てたるものにて、基督教渡來以前の遺物としては北方諸國の古歌ドイツ神學の純粹なる根原たるエツダスなり。渡來以後にはフランスの騎士的思想大に勢力を占め、其の影響を蒙りて出てたる作品には、ラグナー・ロッド・ブロッグの詩、ノルウェーのハコン王哀悼の詩、通俗の歌としては「フォルクヴィン」の續き物あり。而して是に相當するものはデンマークの「バムベピン」なり。是は戰詩と云はんよりは寧ろ史的敘事文とも云ふべきものにして、デンマーク語を以て古代の傳説を寫せるものにして、其の材料はフランス、イングランド、ドイツより藉りたる處少からず。十四世紀の初に至りノルウェー女王イウフェシアは大にフランス文學の輸入に努め、サングランマデコス」の著者は十二世紀の終末に「デンマーク史を著はして古代の傳説を集めたり。

### スペイン及びポルトガルの文學

スペイン國のヨーロッパ諸國の進

歩より離れて其の存在の自ら特立せる爲め、其の文學の根本を尋ねればラチン種の第一流を占めたるに拘はらず、其の衰頹復言ふに忍びざるものあり。素とスペインにては古代のケルト語(即ちイベリア語)及びローマ人に征服せられたる人々のピエトニック熟語、勝利者たるアラビア人の用うる語等ありしも、何れもローマ人が半島征服後創定し、基督教傳來後はゲイシゴス人の維持せるラテン語に對し、毫末の影響だも加ふるを得ず。アラビア人は譬ひ侵略上の勝利者たりしも、宗教言語何れも之をスペインなる基督教徒に強ゆるを得ざりき。唯半島北部の小諸侯の往々之を朝廷内に用ゐる者なきにあらざるも、其の根據未だ固からず。實にスペイン國內基督教徒の用ゐる語はラテン語を基礎とし、之に諸種の地方語を加へたるものなれども、カタローニア、ナヴァール、マジョルカ島にてはプロヴァンス語類似の語行はれぬ。カスチリア散文の最も有名なるは十三世紀にアルフォンソ・エルクザビオの出版せる「シエト・バルヂダス」法典なり。スペインの政治的統一に熱心なるアルフォンソは政治上統一の階梯として熱心に科學的歴史の著述にスペイン語を用ゐしめたり。スカスチリアの詩を觀るに人民の絶えずムーア人



と戦ひ又内亂に苦める爲め、フランスに於ける如く立派なる詩を作るを得ざりしも、而も猶ほ短勁通俗的にして且つ國民的なる牌史を有せり。「シッド」は是等の種類に就き最も傑出せるものにしてスペインの騎士がムーア人と健闘勇戦して毫も屈せざる氣象を描寫せるものなり。又「ロマンチエロ」は更に「シッド」を始め此の類の牌史を蒐集せるものなり。而して是等の中其の最も古きものは粗笨質朴の風を脱せざれども、其の文辭の完きと思想及び神話の醇化せられたるを見得べく、其の何れの部分にもスペイン人特有の急躁過激の調、名譽、愛情の強き發露を窺ふを得べし。斯くカスチール、アスチュリア、ヴァレンシア等がシッドの名譽を歌へる間に、アラゴン、カタローニア等はフランス南部の影響を受くると大なるを以て、プロヴァンス風の文學大に流行し、魔術の如き者頗る諸王族貴族の間に流行せり。されどプロヴァンス風の詩は間もなくアラゴンに滅び、カスチリアに於てのみ後來スペイン第一流の詩人を出すに至れり。即ち十四世紀にドン・サン・トラッピエ<sup>ト</sup>に出て「普通の踏舞」なる書を著はして「死を論じ、尋でローブ・ツ・ウエガ及びカルデロン」出て「縦横其の戯曲的天才を振ひぬ。其他散文にては「エル・コンデルカノ」の編

あり。代々の宰相が其の君主に經綸の術を説きたるものを纂め「アヤラの年代記」はカスチール王兼アラゴン王たるビーター・猛人と黒太子デ・ケズクランの間の關係を描寫せるものなり。

ポルトガル語はスペイン語と同様ラチン語と密接の關係を有し、或る點より云はゞラチン語の方言といひ得べし。而してポルトガルが政治上スペインより獨立し一王國と成りたると同一の理由は、以て其の言語のスペイン語と分離せる理由の説明となし得べし。アラゴンと同様ポルトガルの詩も其の源は「ザルバツール」に出て、バーガンデー公ヘンリー此國を領するに及び勉めて之を紹介し、スペイン的精神よりも一層醇化したるポルトガルの精神を涵養し、スペインの「シッド」と相駢馳する「イネツツ・ヅ・カストロ」を出せり。

**古學研究の復興** 上來述べたる如くヨーロッパの各方面に於て各國特有の國語を生じ以て其の國民の存在を明にせしが、近世の初期に至り古代の技術學藝は滔々として決河の如く各國の文學中に流入し、ヨーロッパ共通の思想を養ひ近世の智識統一の基を開けり。而して是等文藝復興運動は既に中世の末期より



始まり、ペトラルク、ポツカツチオの如き興りて最も力あり。ペトラルクは古代の遺物に對し熱心なる詮索を始め、殆ど一城一市を攻陥すると同様の効力ある古文書古記録の發見をなししが、一四一四年ポツチオ・ブラツチオリニはサン・ガル寺の廢塔中よりクインチリアンの副寫ヴァレリウス・ブラツクス、シリウス・イタリクスの著書の一部ルークレチウス等の十二喜劇集を、ロヂの僧正はチチエロの修辭論を發見せしが、其の他の所謂掘り出し物に至りては枚舉に遑あらず。是と同時にギリシアの諸教授は東ローマ帝國の衰頹せし以テイタリーに難を避くるもの多かりしかば、ペトラルクは就てギリシア語を學び、ポツカツチオはレオンチウス・ピラツスをしてセツサロニカを去り、來りてフロレンスにホーマーを主題として講演を開かしめき。越へて十四世紀の末に至りエムマヌエル・クリソラスも亦フロレンスに赴きギリシア文學を講じ、ベツサリオ、セオドル・オブ・ガザ等も亦之に倣ひ、コンスタンチノーブル陷落後に於ても猶ラスカリス、ムスルス等西行し、ローマ法王ネーブルス王、ミランのメデチー家の歡迎優待を受けたり。是等の風潮は漸次他國にも流入し、フランスのチャールス五世は古學を研究し一四五六年デフェ

ルナスはパリに赴きてギリシア語にて講義を開きぬ。而して學問の淵源たる大學の状態如何と云ふに、ドイツの大學は概ネ十四、五世紀に設立されたり。即ちブラーグ(一三四八)ヴェンナ(一三八六)エルフルト(一三九二)は十四世紀に、ヴェーラツブルグ、ライプツヒ、インゴールシュタット等は、一四〇〇年以後續々創設せられ、ルドルフ・アグリコーラ、コンラッド・ウアイツセル、ジオン・ロイヒリン等の如き碩學之を監督しぬ。イングラントに於ても亦ウインチェスター、イートン等の如き大學中古學研究の氣焰熾に起り、ラヂン詩學の講義あり。スペインにてもアイアラの大學はリザイの歴史を研究翻譯し、ジオン・ツ・メナはオヴァイッド等の著に就て詩作法を研究せり。

### 印刷、彫刻、油繪、火藥製造の諸術

中古印刷術の未だ開けざる頃は堂々たる帝王、諸大學の文庫と雖ども其の藏書極めて稀少にして、藏書の饒多を以て名あるオックスフォード、ハイデルベルグの二大學フランス王サン・ルイの文庫すら一千部を超ゆる能はざりき。其他推して知る可きなり。而るに十五世紀の中葉マインツの人、フニールスト、セツフェル、グーテンベルグ等偶然一種の印刷器械を



發明し從來の方法よりも短時の間に迅速無限の印刷量を得べき方法を世に示せり。オランダ人は此の可動型印刷法發明の功を以て其の國人ハーレムの人コスターに歸すと雖も、其實グーテンベルグ及び同人の効績なることは万口の一致する處又疑ふ可きに非ず。此の器械を以て印刷したる出版物の始めて世に現はれたるは、實に一四五〇年より一四五五年迄の間に、マインツにて、マザレン・バイブルの稱ある、ウルガタの印刷なり。降て十五世紀の末期には幸にして破壊を免れたる古典は悉く出版の榮を得たりき。一四五二年の頃フロレンスの人フィニゲルラなるもの金屬を彫して繪畫を寫す術を發明し、續て酸を用ゐて彫琢する方法も亦發明せられぬ。是より先き一四一一年の頃ヴァン・エックは一三二八年既に世に知られたる乾燥油をグント滯在中に描きたる繪畫に應用し繪畫術革命の基を開きたり。戰術も亦火藥の發明と共に全く一變せしが、サラセン人一二四九年頃之を發明しヨーロッパに傳へたるものゝ如く、而して大砲は十四世紀の初期既に發明せられしも其の種類は主に臼砲なりき。イングランドのエドワード三世は始めて之をクレシーの役に用ゐたるものゝ如く、チオツデアの戰には確に其の効

果の凡ならざるを示しき。フランス人は更に其の砲兵に大改良を加へイングラント人を制し得たり。而して手銃の發明は降りて十五世紀の初期なりしが如し。歩兵はローマ時代に頗る重んぜられしも其後其の價值漸く衰へしが、スイスの槍兵がオーストリア人を破りし以來其の効果頗る世人の尊重を買ふに至れり。要之平民出身の槍兵と銃手は善く貴族及び武士出身の騎兵を制せしより戰場に出て、は何人も同一の價值を有し、專制王國中央集權の制度は万人をして法律の前に同等の權を得せしめ、印刷術の新發明は智識の平等を起すの基を成せり。

## 西洋中世史後編 終



ル
2
17

甲三七  
一